

レーニン選集 第1冊 ￥230.

1957年5月10日 初版発行

1959年5月10日 2版発行

訳者 マルクス・レーニン主義研究所
レーニン全集刊行委員会

発行所 株式会社 大月書店

東京都文京区本郷1の15

電話 (92) 3091・7887

振替 東京 16387

三晃印刷・田中製本

はしがり

一 この選集は、ソ同盟マルクスレーニン主義研究所編『レーニン二巻選集』をもとにし、同研究所と日本のマルクスレーニン主義研究所との意見でいくつかの論文を削除して編集したものである。

一 翻訳には現行版としてもっとも權威のある『レーニン全集』第四版を底本につかった。全集のどこに入っているかは各論文末に示してある。

一 原注は(1)(2)……でしめして各段落のつぎに、訳注は*印をつけて人名注とともに巻末にかかげておいた。ただし人名注は、本文のなかではいちいち印をつけずに、一括してアイウエオ順に配列してある。

一 訳文のなかで傍点がついている箇所は原文ではイタリック体になっている。ゴシック体のところは原文では同様ゴシック体である。

一 訳出には全集刊行委員会の翻訳者団と校閲者団が責任をもってあたり、術語・用語・文体・字づかいの統一をおこなっている。

目次

マルクスとマルクス主義

マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分	六
カール・マルクスの学説の歴史的運命	二
マルクス主義と修正主義	一四

「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように

社会民主主義とたたかっているか？	三
------------------	---

ロシア社会民主主義者の任務	九
---------------	---

貧農に訴える	二一
--------	----

事項注	一九
-----	----

人名注	一七
-----	----

解説	一九
----	----

マルクスとマルクス主義

マルクス主義の三つの源泉と

三つの構成部分

マルクスの学説は、マルクス主義をなにか「有害な宗派」のようなものとみなしているブルジョア科学全体

(官学も自由主義的な科学も)のこのうえもなく大きな敵意と憎悪を全文明世界で呼びおこしている。これ以外の態度など期待しようもない。なぜなら、階級闘争のうえにきずかれていまする社会に「公平無私の」社会科学はありえないからである。官学と自由主義的な科学は、どの道、すべて賃金奴隷制を擁護しているが、マルクス主義は、この奴隷制度にたいして容赦ない戦いを宣言したのである。賃金奴隷制の社会で公平無私の科学を期待するのは、資本の利潤をへらして労働者の賃金をふやすべきであるかどうかという問題で、工場主の公平無私を期待するのと同じくらい、ばかげた、おめでたいことである。だが、それだけではない。哲学の歴史と社会科学の歴史とがまったく明瞭にしめしているように、マルクス主

義には、世界文明の発展の大道を、なれたところ、で発生した、融通のきかない、こちこちの学説といった意味での「セクト主義」らしいものはなにもない。反対に、人類の先進的な思想がすでに提起していた問題に答をあたえた点にこそ、まさにマルクスの天才がある。彼の学説は、哲学、経済学、社会主義のもつとも偉大な代表者たちの学説をまっすぐ直接に継続したものとして生まれたのである。

マルクスの学説が全能なのは、それが正しいからである。それは、完全で、整然としていて、どんな迷信ともどんな反動とも、ブルジョアの圧制のどんな弁護論ともあいられないまとまった世界観を人々にあたえる。それは、人類が十九世紀にドイツ哲学、イギリス経済学、フランス社会主義という形でつくりだした最良のものの正統の継承者である。

マルクス主義の源泉であり、同時に構成部分であるこの三つのものについて、簡単に述べてみよう。

一

マルクス主義の哲学は、唯物論である。唯物論は、ヨーロッパの近代史全体を通じて、わけても十八世紀の終りのフランス——そこではあらゆる中世的がらくたに反対

し、制度上の農奴制と思想上の農奴主義とに反対する決戦「フランチ」が演じられた——では、自然科学のあらゆる教えに忠実で、迷信や偽善などに敵対するただ一つ首尾一貫した哲学であった。そこで、民主主義の敵は、全力をあげて唯物論を「論駁し」、くつがえし、中傷することにつとめ、どの道、結局はつねに宗教を擁護するか、支持することになる、さまざまな形態の哲学的観念論を擁護した。

マルクスとエンゲルスは、このうえなく断固として哲学的唯物論を主張し、この基礎からそれることはすべてはなはだしい誤りであることを、たびたび説明した。彼らの見解は、エンゲルスの著作『ルードウィヒ・フォイエエルバッハ』と『反デューリング論』のなかにもっとも明瞭に、またくわしく述べられているが、これらの著作は『共産党宣言』と同じく——自覚した労働者のだれもがかならず座右におくべき書物である。

しかし、マルクスは十八世紀の唯物論にたちどまっていたのではないで、哲学を前進させた。彼は哲学を、ドイツ古典哲学、とくにヘーゲルの体系の諸成果によって豊かにした。このヘーゲルの体系は、さらにフォイエエルバッハの唯物論に達したのである。この成果のうちの主要なものは弁証法である。すなわち、もっとも完全で、深味の

ある、一面性をまぬかれた形における発展の学説、永遠に発展する物質の反映をわれわれにあたえる人知の相対性にかんする学説である。自然科学の最近の諸発見——ラディウム、電子、元素の変換——は、古い腐敗した観念論へ「あらたに」逆戻りしているブルジョア哲学者の諸学説に反して、マルクスの弁証法的唯物論の正しさをみごとに確認した。

マルクスは、哲学的唯物論をふかめ発展させて、それを徹底させ、その自然認識を人間社会の認識へとおしひろげた。マルクスの史的唯物論は、科学思想の最大の成果であった。それまでの歴史観と政治観を支配していた混沌と氣ままとつてかわって、驚くほどまとまった、整然とした科学的な理論があらわれた。この理論は、生産力の発展の結果として、社会生活の一つの制度から、他の、より高度の制度が發展してくること——たとえば、農奴制から資本主義が成長してくること、をしめしている。

人間の認識が、人間とは独立に存在する自然、すなわち發展しつつある物質を反映するのとまったく同じように、人間の社会的認識（すなわち哲学的、宗教的、政治的、その他さまざまな見解や学説）は社会の経済的構造を反映する。政治的諸制度は、経済的基礎のうえに立つ

上部構造である。たとえば、近代のヨーロッパ諸国家のさまざまな政治形態が、プロレタリアートにたいするブルジョアジーの支配を強めるのに役だっているのを、われわれは見るのである。

マルクスの哲学は完成した哲学的唯物論であつて、それは人類に、とくに労働者階級に、偉大な認識の道具をあたえた。

二

経済的構造はそのうえに政治的上部構造が立つ基礎であることをみとめたマルクスは、この経済的構造の研究にもっとも大きな注意をはらった。マルクスの名著『資本論』は、近代社会すなわち資本主義社会の経済的構造の研究にあてられたものである。

マルクス以前の古典経済学は、もっとも発展した資本主義国であつたイギリスでできあがつた。アダム・スミスとデイヴィッド・リカードは、経済的構造を研究して、労働価値説の基礎をおいた。マルクスは彼らの事業を継続した。彼はこの理論を厳密に基礎づけ、それを首尾一貫して発展させた。彼は、すべての商品の価値はその商品の生産に費される社会的必要労働時間の量によつて決定されることをしめした。

ブルジョア経済学者が物と物の関係（商品と商品の交換）を見たところに、マルクスは人間と人間、人間と人間との結びつきを表現する。貨幣は、この結びつきがますます緊密になつて、個々の生産者たちの全経済生活を切りはなせないように結合して一つの全体にしていることを意味する。資本は、この結びつきのいっそうの発展を意味する。つまり、人間の労働力が商品となるのである。賃金労働者は自分の労働力を、土地、工場、労働用具の所有者に売る。労働者は、労働日の一部を自分と家庭との生活費をつぐなうために使い（賃金）、労働日の他の部分をついで働いて、資本家のために剰余価値をつくりだす。この剰余価値が、利潤の源泉であり、資本家階級の富の源泉なのである。

剰余価値学説は、マルクスの経済理論の礎石である。

労働者の労働によつてつくりだされる資本は、労働者を圧迫し、小経営主を零落させ、失業者軍をつくりだす。工業では、大規模生産の勝利は一目瞭然であるが、農業でも同じ現象が見られる。すなわち、大規模な資本主義的農業の優位が増大し、機械の使用がまし、農民経営は貨幣資本のわなにかかり、おくれた技術が重圧になつて衰微し、零落する。農業では小規模生産の衰微の形態は

ちがっても、小規模生産の衰微そのものは争えない事実である。

資本は小規模生産を破壊することによって、労働生産性を増大させ、最大の資本家たちの連合の独占的地位をつくりだす。生産そのものはますます社会的となる——数十万、数百万の労働者が一つの計画的な経済的有機体にむすばれていく——しかし、共同労働の生産物は、ひとにぎりの資本家によって取得される。生産の無政府性、恐慌、気ちがいじみた市場追求、住民大衆の生活の不安定が増大する。

資本主義体制は、労働者の資本への隷属を増大させるとともに、結合された労働という偉大な力をつくりだす。マルクスは、商品経済の最初の萌芽、単純な交換から、資本主義の最高の諸形態、大規模生産にいたるまで、資本主義の発展をあとづけた。

そして、古い国も新しい国も、いつさいの資本主義国の経験は、年をおってますます多数の労働者に、マルクスの学説の正しいことを、まざまざと示している。

資本主義は全世界で勝利した。しかし、この勝利は、資本にたいする労働の勝利の戸口にすぎない。

三

農奴制がくつがえされて、「自由な」資本主義社会がこの世に現れたとき、この自由が勤労者の抑圧と搾取との新しい制度を意味することが、たちまちあきらかになった。この抑圧の反映として、またそれにたいする抗議として、ただちにまざままな社会主義学説がうまれはじめた。だが、最初の社会主義は空想的社会主義であった。それは資本主義社会を批判し、非難し、のろい、その廃止を夢想し、よりよい制度を空想し、富者にたいして搾取の不道德なことを説きつけた。

しかし、空想的社会主義は真の活路をしめすことはできなかつた。それは、資本主義のもとでの賃金奴隷制の本質を説明することも、資本主義の発展法則を発見することもできず、また新しい社会の創造者となりうる社会的勢力をも見いだすことはできなかつた。

ところが、ヨーロッパのいたるところで、とくにフランスで、封建制度、農奴制の没落に伴っておこったはげしい革命は、階級闘争が全発展の基礎であり推進力であることを、ますます明確に示した。

農奴主階級にたいする政治的自由の勝利で、一つとして必死の抵抗にあわずに獲得されたものはなかつた。資本主義国で、資本主義社会のまざままな階級のあいだの生死をかけた闘争によらずに、多少とも自由な民主主義

的基礎のうえに形成されたものは一つとしてなかった。

マルクスの天才は、彼がだれよりもさきに、世界史のおしえる結論をここからひきだし、それを首尾一貫しておしすすめることができた点にある。この結論が階級闘争の学説である。

人々が、あらゆる道徳的、宗教的、政治的、社会的な空文句や声明や約束のかげにかくれているあれこれの階級の利害を見つけたすべをまなばないかぎり、彼らはいつでも政治上の欺瞞と自己欺瞞との愚かしい犠牲者であつたし、今後もまたいつでもそうであらう。すべて古い制度というものは、どんなに野蛮で腐朽しているように見えても、あれこれの支配階級に力によって維持されているのだということを、改良や改善の賛成者が理解しないうちは、彼らはいつでも古いものの擁護者によつて愚弄されるであらう。そして、これらの階級の抵抗を粉碎するには、一つの手段しかない。それは、古いものを一掃して新しいものをつくりだすことのできる勢力となることができるし、またその社会的地位からして、そうならざるをえない勢力を、われわれのまわりの社会そのもののなかに見いだし、この勢力を啓蒙して、闘争へ組織することである。

マルクスの哲学的唯物論だけが、こんにちまでのすべ

ての被抑圧階級ははかなくすごしてきた精神的奴隷状態から抜けでる道を、プロレタリアートにしめた。マルクスの経済理論だけが、資本主義全体の構造のなかでプロレタリアートがしめる真の地位をあきらかにした。

アメリカから日本に、スウェーデンから南アフリカにいたる全世界で、プロレタリアートの自主的な組織の数がふえている。プロレタリアートは、その階級闘争をおこないながら自分を啓蒙し教育し、ブルジョア社会の偏見から自分を解放し、ますます緊密に結束し、自分の成功を正しくはかることをまなび、自分の勢力をきたえ、おさえがたい力で成長している。

『プロスヴェシチエーニエ』第三号、一九一三年三月

署名—ヴェ・イ

雑誌『プロスヴェシチエーニエ』のテキストによって印刷

全集第四版、第一九巻、三一八ページ

カール・マルクスの学説の歴史的運命

マルクス学説の主要な点は、社会主義社会の創造者となるプロレタリアートの世界的役割を解明したことである。マルクスがこの学説を述べてからこのかた、全世界で生じた諸事件の経過は、この学説を確証したであろうか？

マルクスがはじめてこの学説を提出したのは一八四四年であった。一八四八年にでた、マルクスとエンゲルスの『共産党宣言』は、すでにこの学説について、まとまった、系統的な、こんにちでもこれにまさるものがない叙述をあたえている。このとき以後の世界史は、あきらかに三つの主要な時期に分けられる。すなわち、(一)一八四八年の革命からパリ・コムニューン(一八七一年)まで、(二)パリ・コムニューンからロシア革命(一九〇五年)まで、(三)ロシア革命以後、である。

これらの時期のそれぞれにマルクスの学説のたどった

運命を概観してみよう。

一

第一期のはじめには、マルクスの学説はけつして支配的ではなかった。それは、非常にたくさんあった社会主義の諸分派または諸流派の一つにすぎない。支配的だったのは、大体わが国のナロードニキ主義に似かよった形態の社会主義であった。すなわち、歴史的運動の唯物論的な基礎を理解していないこと、資本主義社会のおのの階級の役割と意義を区別できないこと、民主主義的な改革のブルジョアの本質を、「人民」とか、「正義」とか、「権利」などという、さまざまのえせ社会主義的な空文句でおおいかくしていることがそれである。

一八四八年の革命は、これらすべての騒々しい、雑多な、仰々しい、前マルクス主義的社会主義の諸形態に、致命的な打撃をあたえた。この革命は、すべての国で、さまざまな社会階級の行動をしめした。一八四八年のパリの六月事件で共和主義的ブルジョアジーが労働者を射殺したことによって、プロレタリアートだけが社会主義的本性をもっていることが、最後的に明確になった。自由主義的ブルジョアジーは、どんな反動派よりも、プロレタリア階級の自主性のほうを、百倍もおそれていた。

臆病な自由主義派は反動派のまえにはいつくばった。農民は封建制度の残存物が廃止されたことで満足して、現秩序の味方にかわり、ほんのときおり労働者民主主義派とブルジョア自由主義派のあいだを動揺しただけであった。非階級的な社会主義や非階級的な政治を説く学説は、すべてつまらないわごとであることがわかった。

バリ・コンミュニオン^{*}（一八七一年）は、ブルジョアの改革のこういう発展をおわらせた。共和制——すなわち階級関係がもつともあらわな形で現れてくる国家組織の形態——が確立したのは、ひとえにプロレタリアートの英雄的行動のおかげであった。

ヨーロッパの他のすべての国では、発展はもつとこみいった、もつと未完成なものであったが、やはり同じ仕組みのブルジョア社会がうまれた。嵐と革命の時期である第一期（一八四八—一八七一年）の終りには、前マルクス主義的社会主義は死滅していった。自主的なプロレタリア諸政党、すなわち第一インタナショナル^{*}（一八六四—一八七二年）とドイツ社会民主党が生まれた。

二

第二期（一八七二—一九〇四年）は、「平和的な」性格の点で、革命がない点で第一期とちがっている。西欧

はブルジョア革命をおわっていたし、東洋はまだそこまで成熟していなかった。

西欧は、未来の改革の時代を「平和的に」準備する局面にはいった。どこでも、根本においてプロレタリア的な社会主義政党が形づくられ、これらの党はブルジョア議会制度を利用し、自分たちの日刊新聞、自分たちの啓蒙機関、自分たちの労働組合、自分たちの協同組合をつくりだすことをまんだ。マルクスの学説は完全な勝利をおさめ、そして——幅をひろげていった。プロレタリアートの勢力をよりぬき結集する過程、きたるべき戦闘にそなえて彼らを訓練する過程が、ゆつくりと、だが着実にすすんでいった。

マルクス主義が理論的に勝利したため、その敵はマルクス主義者に仮装することをよぎなくさせた。これが歴史の弁証法である。内部のくさってしまった自由主義は、社会主義的な日和見主義の形で生きかえりを試みた。偉大な戦闘にそなえて勢力を訓練する時期を、彼らは、これらの戦闘を放棄するという意味に解釈した。賃金奴隷制に反対してたたかうために奴隷の状態を改善するということ、を、彼らは、五コペイカ銅貨とひきかえに奴隷が自分の自由の権利を売るという意味に説明した。彼らは、臆病にも、「社会平和」（すなわち奴隷所有者との平和）

や、階級闘争の放棄、等々を説いた。社会主義的議員や、労働運動のいろいろの役員や、インテリゲンツィアの「同情者」のなかに、彼らの味方は非常に多かった。

三

日和見主義者たちが「社会平和」や、「民主主義」のもとは嵐が必要でないことやを、ほめちぎるまもなく、アジアにもっとも大きな世界的嵐の新しい源泉があらわれてきた。ロシア革命につづいて、トルコ、ペルシア、中国の革命がおこった。われわれはいままさに、これらの嵐の時代、そしてそれがヨーロッパに「反映」する時代に生きている。いまさまざまな「文明的な」豺狼（さいろう）がきばをといでねらっている偉大な中華民国の運命がたとえどうなるうとも、地上のどんな力も、アジアに古い農奴制を復活し、アジアおよび半アジア諸国の人民大衆の英雄的な民主主義を地上から一掃することはできないであろう。

大衆闘争が準備され発展していく条件に注意をはらわない若干の人々は、ヨーロッパで資本主義との決戦がながらく延びのびになっているために、絶望と無政府主義に陥っていた。いまだでは、無政府主義的な絶望がどれほど近視眼的で弱気なものであるかがわかる。

八億の人口をもつアジアがヨーロッパと同じ理想のための闘争に引きいられているという事実からは、絶望ではなく、勇気を汲みとらなければならない。

アジアの諸革命もまた同じように、自由主義派が無気力で卑劣なこと、民主主義の大衆の自主性が非常に重要であること、プロレタリアートとあらゆる種類のブルジョアジーとのあいだには明白な境界があることを、われわれにしめした。ヨーロッパでもアジアでもこのようなことを経験したのに、まだ非階級的な政治や非階級的な社会主義を説くものは、まったく、檻（かぎ）にいられてオーストラリアのカンガルーともいっしょに見世物にしてしかるべきである。

アジアのあとにつづいてヨーロッパも——ただし、アジアふうにはなく——すこしうごきはじめた。一八七二—一九〇四年の「平和な」時期は永久に去ってかえらない。物価騰貴とトラストの圧迫は経済闘争をかつて見たことのないほど激化させているし、自由主義によってもっともひどく腐敗させられたイギリスの労働者さえ立ちあがらせている。もっとも「頭迷な」ブルジョア・ユンケル的な国のドイツでさえ、政治的危機がわれわれの目のまえで成熟しつつある。狂気じみた軍備拡張と帝國主義政策とによって、現代のヨーロッパは、なによりも

火藥樽に似た「社会平和」にかえられていく。そして、あらゆるブルジョア政党的の分解とプロレタリアートの成熟とがたゆみなくすすんでいる。

マルクス主義が出現してからの世界史の三つの大きな時代は、それぞれマルクス主義に新しい確証と新しい勝利をもたらした。しかし、きたるべき歴史的時代は、プロレタリアートの学説としてのマルクス主義に、いっそう大きい勝利をもたらすであらう。

『プラウダ』第五〇号、一九一三年三月一日

署名——ヴェ・イ

新聞『プラウダ』のテキストによって印刷

全集第四版、第一八巻、五四四—五四七ページ

マルクス主義と修正主義

幾何学の公理が人間の利害をおかすなら、それはきつと論駁されるであらう、という有名な格言がある。神学の古い偏見をおかした自然科学上の理論は、これまでももっともはげしい闘争をひきおこしたし、また現にひきおこしている。近代社会の先進的階級を啓蒙し組織するのに直接役だつマルクスの学説が、この階級の任務をしめし、現代の制度が——経済的發展によって——不可避免地に新しい制度と交代することを証明していることはおどろくにとりない、この学説がその生涯の一步一步を、戦いといつていかなければならなかったのは、おどろくにたりない。

有産階級の青年子弟を愚かにし、内外の敵とたたかわせようと彼らを「訓練」するために、官学の教授たちがお役所式に講義しているブルジョア科学や哲学のことは、言うまでもない。この科学は、マルクス主義はすでに論破され絶滅されたと公言して、マルクス主義のことを聞

こうとさえしない。社会主義を論駁して出世をする若い学者も、ありとあらゆるぼろぼろの「体系」を後生大事にまもりつづけているおいぼれた老人も、同じように熱心にマルクスを攻撃している。マルクス主義が成長し、その思想が労働者階級のなかにひろまり、つよまっていくなつて、マルクス主義にたいするこうしたブルジョアの突撃は、不可避免的にますます頻繁に、またはげしくなっていく。だが、マルクス主義は、官許の科学がそれを「絶滅」するたびに、ますますつよまり、きたえられ生きいきしたものとなるばかりである。

しかし、マルクス主義は、労働者階級の闘争と結びついていた、そして主としてプロレタリアートのあいだにひろまっていた学説のあいだでさえ、けつして一挙にその地位をかためたわけではなかった。マルクス主義は、それが生れてから最初の半世紀間（十九世紀の四〇年代以降の）は、マルクス主義に根本的に敵対するものもろの理論と闘争した。四〇年代の前半には、マルクスとエンゲルスは、哲学的観念論の見地に立つ急進的な青年ヘーゲル派と決着をつけた。四〇年代の終りには、闘争は経済学説の分野で、ブルードン主義にたいしておこなわれた。五〇年代にはこの闘争が終りをつげた。一八四八年の嵐の年に出現した党派や学説の批判がそれであった。六〇

年代には、闘争は、一般理論の分野から、直接の労働運動にいつそう近い分野にうつった。インタナショナルからバスターニン主義を追放したことがそれであった。ドイツでは、七〇年代の初めにブルードン主義者のミューレルベルガーが、七〇年代の終りには実証主義者のデューリングが、しばらくのあいだ頭角をあらわした。しかし、プロレタリアートにたいする両者の影響力はもはやまったくとるにたりないものであった。マルクス主義はすでに、労働運動の他のすべてのイデオロギーにたいして無条件の勝利をえようとしていた。

前世紀の九〇年代には、この勝利はすでに大体のところ完成されていた。ブルードン主義の伝統がどこよりも長くのこっていたラテン系諸国でさえ、労働者党は、事実上その綱領と戦術をマルクス主義に立脚して立てていた。復活した労働運動の国際組織——定期の国際会議という形での——は、はじめから、ほとんど闘争なしに、すべての本質的な点で、マルクス主義の基盤に立っていた。しかし、マルクス主義が、それに敵対する学説で多少ともまもったものをことごとく駆逐してしまうと、これらの学説に表現されていた諸傾向は別の道をさがしはじめた。闘争の形態と動機はかわったが、闘争はつづいた。そして、マルクス主義が生れてからの第二の半世